

箱  
崎  
47

—箱崎遺跡第68次調査報告—

# 箱崎 47

—箱崎遺跡第68次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1166 集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一六六集

二〇一二

福岡市教育委員会

2012

福岡市教育委員会





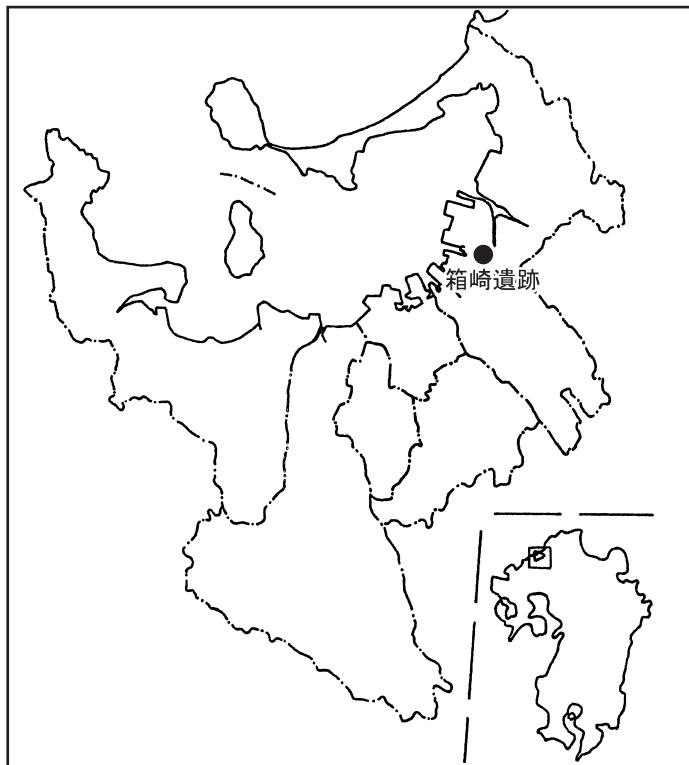




HAKO                    ZAKI  
箱                    崎 47

—箱崎遺跡第68次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1166集



遺跡略号 HKZ-68  
調査番号 1034

2 0 1 2

福岡市教育委員会



## 序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの責務であります。また、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくことも事実であります。そのため、本市教育委員会では事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存によって後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、共同住宅建設に伴い調査を実施した箱崎遺跡第68次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、主に平安時代から鎌倉時代の中世集落跡を確認すると共に、生活用具や貿易陶磁器等の交易品が出土しました。これらは、当時の箱崎地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、事業者をはじめとする数多くの関係者のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

## 例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市東区箱崎1丁目2718-4、2930-4において発掘調査を実施した箱崎遺跡第68次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託および国庫補助事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、榎本義嗣が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、榎本・平川敬治が行った。
6. 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、榎本が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は、榎本が行った。
8. 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 40'$ 西偏する。
9. 本書に掲載した国土座標値は、日本測地系（第II座標系）によるものである。
10. 遺構の呼称は、井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、ピットをSPと略号化した。
11. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
12. 本書で記述する遺物の分類、説明等については、以下の文献を参考とした。

山本信夫「統計上の土器 - 歴史時代土師器の編年研究によせて -」

『乙益重隆先生古稀記念 九州上代文化論集』1990年

横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について - 型式分類と編年を中心として -」

『九州歴史資料館研究論集 4』1978年

太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 -』（太宰府市の文化財第49集）2000年

13. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、同センターに保管される予定である。

14. 本書の執筆および編集は、榎本が行った。

遺跡名	箱崎遺跡	調査次数	第68次	遺跡略号	HKZ-68
調査番号	1034	分布地図図幅名	箱崎34	遺跡登録番号	022639
申請地面積	196.5m <sup>2</sup>	調査対象面積	81.8m <sup>2</sup>	調査面積	66.4m <sup>2</sup>
調査地	福岡市東区箱崎1丁目2718-4、2930-4			事前審査番号	22-2-618
調査期間	平成23(2011)年1月11日～2月14日				

## 本文 目 次

I.	はじめに.....	1
1.	調査に至る経緯.....	1
2.	調査の組織.....	1
II.	遺跡の立地と環境.....	2
III.	調査の記録.....	7
1.	概要.....	7
2.	遺構と遺物.....	7
1)	井戸 (SE) .....	7
2)	土坑 (SK) .....	14
3)	溝 (SD) .....	14
4)	その他の遺物.....	14
3.	結語 .....	14

## 挿 図 目 次

第1図	箱崎遺跡位置図 (1/25,000) .....	3
第2図	箱崎遺跡調査区位置図 (1/5,000) .....	5
第3図	調査区位置図 (1)(1/1,000) .....	6
第4図	調査区位置図 (2)(1/300) .....	6
第5図	調査区全体図 (1/100) および調査区北西壁土層実測図 (1/60) .....	8
第6図	SE001 実測図 (1/40) .....	9
第7図	SE001 出土遺物実測図 (1/3、1/4) .....	10
第8図	SE002・004 実測図 (1/40) .....	11
第9図	SE002 出土遺物実測図 (1/3) .....	11
第10図	SE003・004 出土遺物実測図 (1/3、1/4) .....	12
第11図	SK053、SD005 実測図 (1/20、1/40) .....	13
第12図	ピット、遺構検出時出土遺物実測図 (1/3) .....	14

## 表 目 次

第1表	箱崎遺跡調査一覧表.....	4
-----	----------------	---

## 図 版 目 次

図 版 1	(1) 調査区南東側全景 (北東から)	(2) 調査区北西側全景 (北東から)
図 版 2	(1) 調査区北西壁土層 (東から) (3) SE002 (南東から)	(2) SE001 (南東から)
図 版 3	(1) SE003 (東から) (3) SD005 土層 (北西から)	(2) SE004 (北東から)
図 版 4	出土遺物	

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成 22(2010) 年 10 月 1 日付けで、福岡市東区箱崎 1 丁目 2718-4、2930-4(敷地面積 : 196.5 m<sup>2</sup>) における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、同市南区在住の地権者より福岡市教育委員会宛てになされた(事前審査番号 : 22-2-618)。

これを受けた教育委員会文化財部埋蔵文化財第 1 課事前審査係では、事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれていることから、同年 12 月 2 日に確認調査を実施し、地表下約 1.1 m において中世と考えられる遺構や遺物を確認した。

この調査成果をもとに両者で協議を行なった結果、住宅建築部分については鋼管杭基礎を打設する必要があり、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、当該建物建築部分(面積 : 81.8 m<sup>2</sup>) を対象とした記録保存のための本調査を実施することとなった。

その後、平成 23 年 1 月 4 日に事業主体者である個人を委託者、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、1 月 11 日より発掘調査を、翌平成 23 年度に整理・報告書作成を同部埋蔵文化財第 2 課が行うこととなった。なお、事業主体が個人であることから、これらにかかる費用の一部に国庫補助を適用した。

### 2. 調査の組織

調査委託 : 個人

調査主体 : 福岡市教育委員会

調査総括 : 埋蔵文化財第 2 課長 田中壽夫

同課調査第 1 係長 米倉秀紀

同課調査第 2 係長 菅波正人(整理)

調査庶務 : 埋蔵文化財第 1 課管理係 古賀とも子

事前審査 : 埋蔵文化財第 1 課長 濱石哲也

同課事前審査係長 宮井善朗

同課事前審査係主任文化財主事 加藤良彦

同課事前審査係文化財主事 木下博文(確認調査)

調査担当 : 埋蔵文化財第 2 課調査第 1 係文化財主事 榎本義嗣

調査作業 : 阿部純子 崎村雄介 田端名穂子 永松弘恵 中村幸子 花田則子 光安昌子 鷺崎哲夫

整理作業 : 木本恵利子 松尾真澄

発掘調査から報告書作成に至るまで、地権者、積水ハウス株式会社をはじめとする関係者各位には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

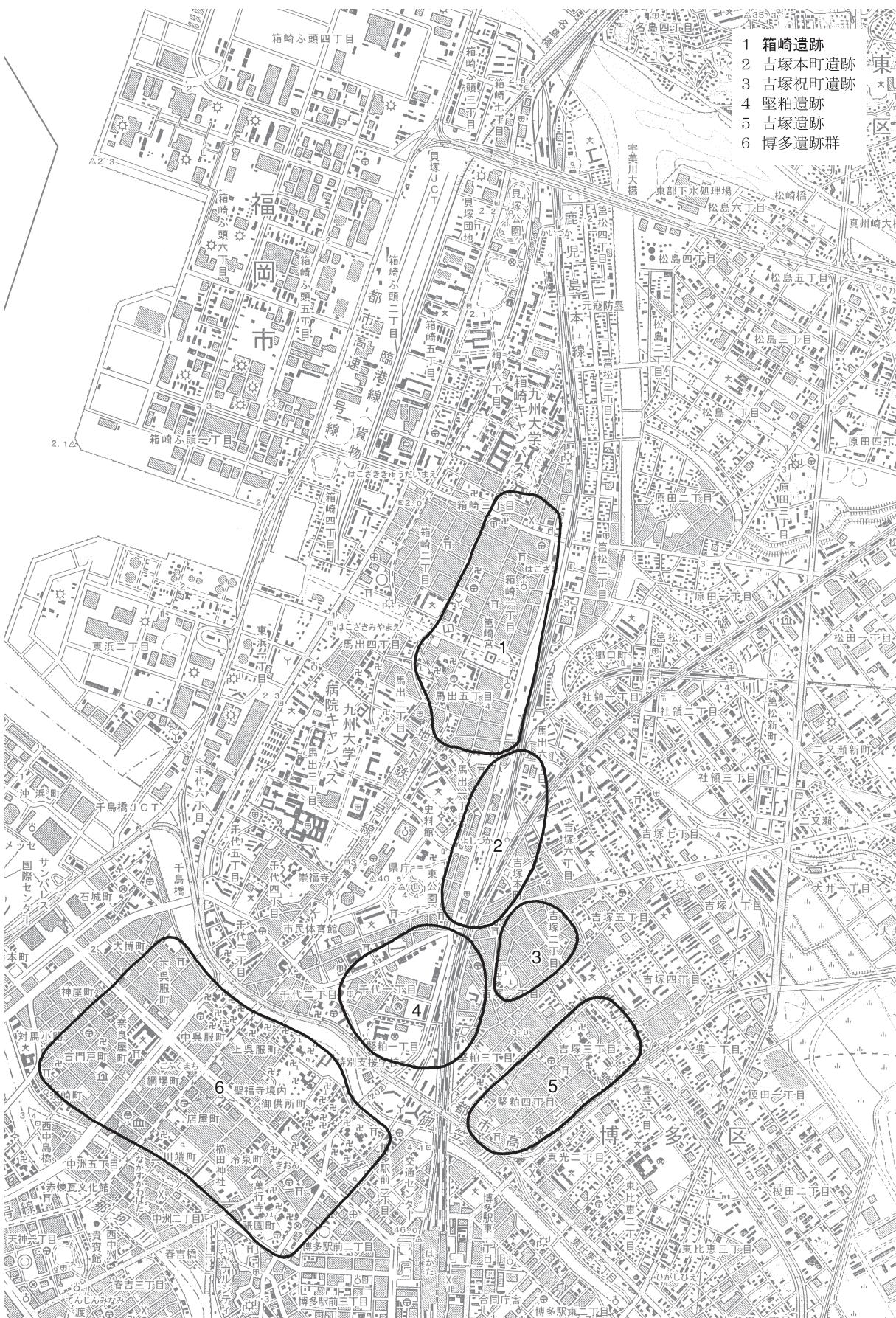
## II. 遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は博多湾岸に形成された箱崎砂層とよばれる古砂丘上に立地している。この砂丘は東区箱崎から博多区堅粕、中央区天神・荒戸を経て、早良区百道に至っており、形成時期については遅くとも縄文時代晩期を下らないとする自然科学的知見が得られている。これらの砂丘は鞍部や旧河道により画されるものと考えられ、第1図の範囲では微高地上に6遺跡が知られる。本遺跡はこの砂丘の北端部に位置し、西側を博多湾、東側を多々良川の支流である宇美川に画される。この東側にはかつて入り江が博多湾から湾入しており、中世には「箱崎津」と呼ばれた港として機能していた。

第2図は現在までの本調査および試掘調査で確認された砂丘面の標高を基に旧地形の等高線を推定した図を現況図に重ねたものである。遺跡北東端部で実施された第10次調査は東西方向に尾根線を分断しており、調査区のほぼ中央に標高2.8mの緩いピークが認められる。この尾根は第6次・53次調査区付近から南西方向に延び、第7次調査区付近からやや東側に振れて、筥崎宮境内、第2次・52次調査区付近まではほぼ南北方向に延伸する。砂丘尾根は遺跡南半部では東側に大きく振れるため、砂丘の西側には広い緩斜面が形成される。また、遺跡南東部の第26次調査8区から遺跡南西部の第27次調査区付近には東西方向の深い谷が貫入し、砂丘鞍部を形成していたものと推定される。該地付近には昭和初期まで水路が遺存していたことからも、従来低地であったと考えられる。また、その鞍部を挟んだ南東側の第22次調査4区および第26次調査6区付近には標高約3.5mを測る等高線が認められ、更に南側に延伸するものと考えられるが、その東側は後述する様に河川による侵食が進み、砂丘東側の斜面は殆ど認められない。

また、同図中の網線は試掘調査等における遺跡の有無によって遺跡範囲を推定したもので、西側は標高2mの等高線がその西限をほぼ示している。東端部では遺跡東側を北流する宇美川によって砂丘端が開析され、崖面を形成するものと推定され、更にその東側では水性の顕著な堆積物が確認されている。第10次・41次調査東端部や第30次調査15区では砂丘端部が検出されており、北東端部をおさえることができる。また、第8次調査の北側では試掘調査によって、時期不詳ながら杭列も確認されている。東限については、筥崎土地区画整理事業に伴う調査によりJR鹿児島本線に沿うラインが該当する。遺跡の南端は、先述した様に南東側では鞍部を挟み、更に遺跡範囲が南に拡大する可能性が高く、第40次調査19区や第49次調査においても古墳時代以降の遺構が検出されている。また、北側では第36次・61次調査において密度の濃い遺構群が確認されており、北側についても従来推定されていた遺跡範囲が拡大することが明らかになってきた。

本遺跡の発展の契機となったのは筥崎宮の創建で、延長元年(923)に穂波郡大分宮を遷座したと伝えられる。永承6年(1051)には石清水八幡宮の別宮となるが、保延6年(1140)には一時大宰府の府領となつた。しかし、文治元年(1185)には再び石清水八幡宮からの補任がなされ、この間、仁平元年(1151)には大宰府檢非違所の官人らが博多とともに箱崎の宋人大追捕を行つてゐる。これを記した『宮寺縁事抄』には両地区に宋人が在住していたことや1,600軒以上の家屋が存在したことが記述されており、日宋貿易に関与した宋商人の家屋を含む町が既に該地に形成されていたことを裏付ける。文永11年(1274)の元寇(文永の役)の際には筥崎宮が焼失したことが伝えられており、同地区一帯も被災した可能性が高い。なお、元の再度の襲来に備え、建治2年(1276)、箱崎地区の海岸線に薩摩国の分担によつて元寇防塁が築かれる。至治3年(1323)に沈没したことが判明している韓国新安沖の沈没船からは「筥崎宮」銘の木簡が出土しており、同宮は該期においても引き続き日本の大陸交易拠点の一つとして位置付けられる。中世後半期においても『海東諸國紀』や『宗湛日記』等に箱崎の地名が散見する。



第1図 箱崎遺跡位置図 (1/25,000)

箱崎遺跡では現在までに 68 次の調査が実施されている（第 1 表・第 2 図）。これまでに最も古く位置付けられる遺物としては、第 6 次調査出土の磨製石斧や第 20 次調査出土の刻目突帯文土器の甕片が挙げられるが、後世の遺構からの出土で、現在のところ最も時期の遡る遺構としては第 30 次調査 16 B 区の弥生時代後期初頭の甕棺墓がある。また、古墳時代初頭では、第 8 次・20 次・22 次・26 次・30 次・40 次調査等において竪穴住居や周溝墓をはじめとする遺構が検出されている。第 47 次調査 B 区では、碧玉製管玉の未製品や剥片が出土しており注目される。また、第 40 次調査では砂丘上に築造された 5 世紀代の葺石を有する円墳が確認されている。これらはいずれも砂丘尾根から陸側の東側緩斜面上に立地する調査区であり、古墳時代では自然地形的に安定した環境を選択したことが看取される。

その後、数世紀の断絶が認められるが、筥崎宮創建時の 10 世紀代の遺構は同宮の南東側に近接する第 2 次・22 次・26 次・30 次・40 次・54 次調査区において確認されている。先に述べた砂丘鞍部の在り方等を勘案すると、その具体的な位置は不詳であるが、前述した港湾施設がこれら調査区の東側に存在する可能性が示唆される。11 世紀代では前代のやや拡大した範囲において該期の遺構が確認され、これらは尾根線および東側緩斜面上に立地する。井戸等の生活遺構が密度をもって存在することから中世集落形成の端緒として指摘される。12 世紀中頃からは海側の西側緩斜面の利用も開始され始める。12 世紀後半には遺跡の広範囲に生活域が展開し、鋳造関連の遺物の出土や豊富な副葬品をもつ屋敷墓の確認が報告されている。この時期は箱崎が門前町から都市へと転じていく段階と考えられ、発掘調査成果は先の文献史料が示す都市的な様相とも合致する。13 世紀以降もほぼ全域に遺構が確認されるが、西側斜面を積極的に生活の場として活用している。また同斜面上の北西側を主として、第 11 次・21 次・24 次・51 次・57 次等で確認されている 13 世紀後半代の焼土層は、文永の役に起因する可能性が高く、筥崎宮と併せ一帯の市街地が被災したことが推測される。また、中世後半期においても各所で遺構が確認されているが、前半期に比してやや少数である。

#### ＜引用・参考文献＞

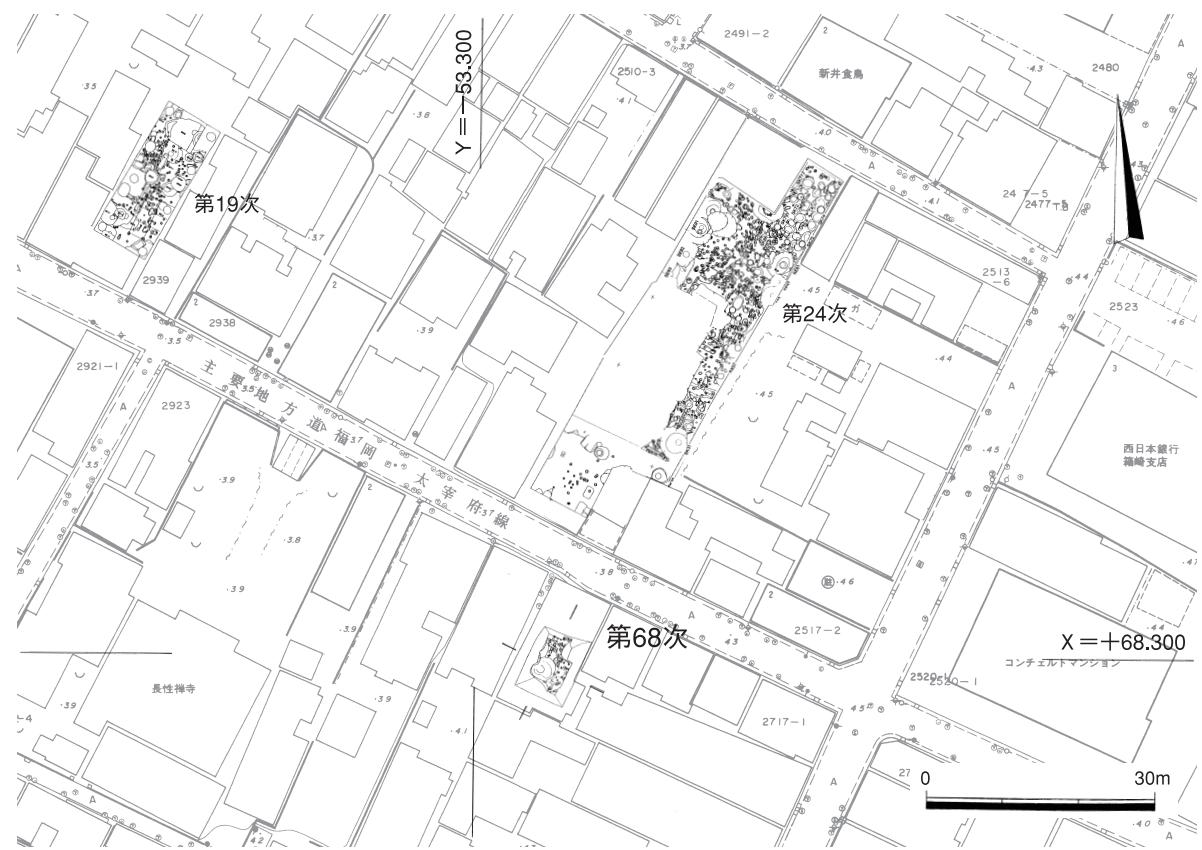
- ・小林 茂他編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会 1998 年
- ・川添 昭二編『よみがえる中世 1 東アジアの国際都市 博多』平凡社 1988 年
- ・榎本 義嗣「福岡市所在の箱崎遺跡について」『中世都市研究会 2003 年九州大会資料集』2003 年

調査次数	調査年度	主要な遺構の時期	報 文	調査次数	調査年度	主要な遺構の時期	報 文
第 1 次	1983	12世紀後半～15世紀	『高速鉄道関係 VIII』市報第193集(1988)	第35次	2002	12世紀後半～14世紀	市年報Vol.17(2004)
第 2 次	1986	10世紀後半～15世紀	『箱崎遺跡』県報第79集(1987)	第36次	2002	14世紀～15世紀	市年報Vol.17(2004)
第 3 次	1989	12世紀中頃～15世紀	『箱崎遺跡 2』市報第262集(1991)	第37次	2002	12世紀後半～14世紀	『箱崎30』市報第951集(2007)
第 4 次	1989	11世紀	市年報Vol.4(1991)	第38次	2002	13世紀後半～14世紀	『箱崎20』市報第814集(2004)
第 5 次	1989	12世紀～15世紀	『箱崎 3』市報第273集(1992)	第39次	2002	11～12世紀	『箱崎24』市報第854集(2005)
第 6 次	1989	12世紀後半～13世紀	『箱崎遺跡 4』市報第459集(1996)	第40次	2003	古墳時代、10～15世紀	『箱崎27』市報第948集(2007) : 18区 『箱崎28』市報第949集(2007) : 19区
第 7 次	1991	12世紀～13世紀	『箱崎遺跡 4』市報第459集(1996)	第41次	2003	12世紀後半～13世紀	『箱崎24』市報第854集(2005)
第 8 次	1994	古墳時代、12世紀中頃～13世紀	『箱崎 5』市報第591集(1999)	第42次	2003	12世紀～14世紀	『箱崎25』市報第896集(2006)
第 9 次	1994	11世紀～13世紀	『箱崎遺跡 5』市報第556集(1998)	第43次	2003	11～12世紀	市年報Vol.18(2005)
第 10 次	1994	12世紀前半～13世紀	『箱崎 6』市報第591集(1998)	第44次	2003	12世紀後半～14世紀	『箱崎24』市報第854集(2005)
第 11 次	1997	12世紀後半～13世紀	『箱崎 8』市報第592集(1999)	第45次	2003	12～13世紀	『箱崎30』市報第951集(2007)
第 12 次	1997	12世紀～13世紀	『箱崎 9』市報第950集(2007)	第46次	2004	古墳時代、10世紀～15世紀	『箱崎27』市報第948集(2007) : 20区 『箱崎28』市報第949集(2007) : 21区
第 13 次	1997	15世紀	『箱崎 8』市報第592集(1999)	第47次	2004	古墳時代、11～15世紀	『箱崎36』市報第1046集(2009)
第 14 次	1998	12世紀後半～14世紀前半	『箱崎 9』市報第623集(2000)	第48次	2004	近世	『箱崎44』市報第1163集(2012)
第 15 次	1998	11世紀後半～12世紀	『箱崎 10』市報第810集(2004)	第49次	2005	古墳時代、11～13世紀	『箱崎28』市報第949集(2007)
第 16 次	1998	12世紀～15世紀	『箱崎 11』市報第703集(2002)	第50次	2005	14～15世紀、近世	『箱崎44』市報第1163集(2012)
第 17 次	1998	12世紀中頃～16世紀	『箱崎12』市報第704集(2002)	第51次	2005	12世紀～14世紀	『箱崎31』市報第952集(2007)
第 18 次	1999	12世紀中頃～16世紀	『箱崎10』市報第664集(2001)	第52次	2006	11～15世紀	『箱崎33』市報第997集(2008)
第 19 次	1999	12世紀後半～14世紀	『箱崎10』市報第664集(2001)	第53次	2006	12～13世紀前半、16世紀以降	『箱崎32』市報第996集(2008)
第 20 次	1999	古墳時代、12世紀前半～13世紀	『箱崎14』市報第767集(2003)	第54次	2006	10世紀後半～15世紀	『箱崎34』市報第998集(2008)
第 21 次	2000	12世紀中頃～14世紀	『箱崎13』市報第705集(2002)	第55次	2006	12世紀後半～15世紀	『箱崎36』市報第1046集(2009)
第 22 次	2000	古墳時代、10世紀～15世紀	『箱崎17』市報第811集(2004) : 4 区	第56次	2006	12世紀後半～14世紀	『箱崎37』市報第1047集(2009)
第 23 次	2000	12世紀、13世紀後半～14世紀	『箱崎22』市報第852集(2005) : 5 区	第57次	2006	12世紀後半～14世紀、16世紀	『箱崎35』市報第999集(2008)
第 24 次	2000	12世紀後半～14世紀	『箱崎12』市報第704集(2002)	第58次	2007	12世紀	市年報Vol.22(2009)
第 25 次	2001	13世紀～近世	『箱崎15』市報第768集(2003)	第59次	2007	12～13世紀	『箱崎38』市報第1048集(2009)
第 26 次	2001	古墳時代、10世紀～15世紀	『箱崎25』市報第896集(2006)	第60次	2007	近世	『箱崎44』市報第1163集(2012)
第 27 次	2001	11世紀後半～15世紀	『箱崎21』市報第815集(2004) : 6・9・10 区	第61次	2008	12～13世紀	『箱崎39』市報第1092集(2010)
第 28 次	2001	14世紀～近世	『箱崎23』市報第853集(2005) : 7・8 区	第62次	2008	12～13世紀、近世	『箱崎40』市報第1093集(2010)
第 29 次	2002	12世紀後半～15世紀	『箱崎18』市報第812集(2004)	第63次	2008	12～14世紀	『箱崎41』市報第1094集(2010)
第 30 次	2002	古墳時代、10世紀～15世紀	『箱崎42』市報第1127集(2011)	第64次	2009	12～14世紀	『箱崎43』市報第1128集(2011)
第 31 次	2002	12世紀後半～13世紀	『箱崎19』市報第813集(2004)	第65次	2009	12世紀後半	市年報Vol.24(2010)
第 32 次	2002	13世紀後半～14世紀前半、近世	『箱崎25』市報第896集(2006)	第66次	2010	12～13世紀	『箱崎45』市報第1164集(2012)
第 33 次	2002	12世紀後半～14世紀	『箱崎42』市報第1127集(2011)	第67次	2010	12～14世紀	『箱崎46』市報第1165集(2012)
第 34 次	2002	12世紀後半～14世紀	市年報Vol.17(2004)	第68次	2010	13世紀	『箱崎47』市報第1116集(2012) : 本報告

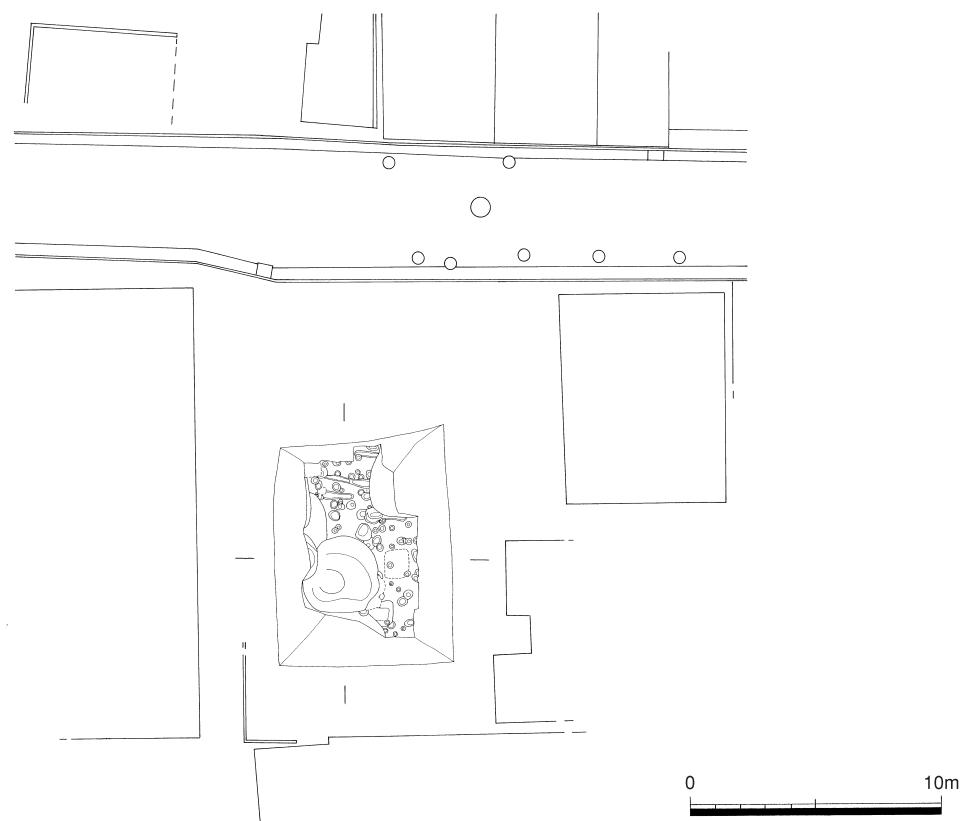
第 1 表 箱崎遺跡調査一覧表



第2図 箱崎遺跡調査区位置図 (1/5,000)



第3図 調査区位置図(1)(1/1,000)



第4図 調査区位置図(2)(1/300)

### III. 調査の記録

#### 1. 概要

今回報告する箱崎遺跡第68次調査区は、東区箱崎1丁目2718-4、2930-4に所在する。同遺跡の中央部のやや北側に位置し、南北方向に延びる古砂丘の尾根からやや西側に下った緩斜面に立地している。調査前の現況は、建物解体後の標高約4mを測る平地であった。なお、調査区前面の道路を隔てた北西側では、第24次調査が行われている。

調査区の土層（第5図）は、表層の客土および旧表土（1・2層）以下は、搅乱を伴うものの、6～11層の水平堆積層が認められ、中世から近世の遺物を包含する。土層観察によって、検出した遺構は少なくともやや砂質の暗褐色土（10層）上面より掘り込まれることが判明した。10層以下には薄く拡がる暗黄茶褐色砂質土（11層）、砂丘基盤の黄褐色砂が続く。この砂層の標高は、約2.6mを測り、調査区が狭小なことから、大きな標高差は認められない。また、基盤砂層の下位についても一部を掘り下げ確認したところ、黄褐色の砂と粗砂が互層となり、いわゆるトラ縞状の風成砂であった。

今回の遺構検出は、基盤の黄褐色砂上面までを重機によって剥ぎ取って実施し、中世前半の井戸や土坑、溝、ピットを確認できた。出土遺物量は、コンテナケースにして6箱である。

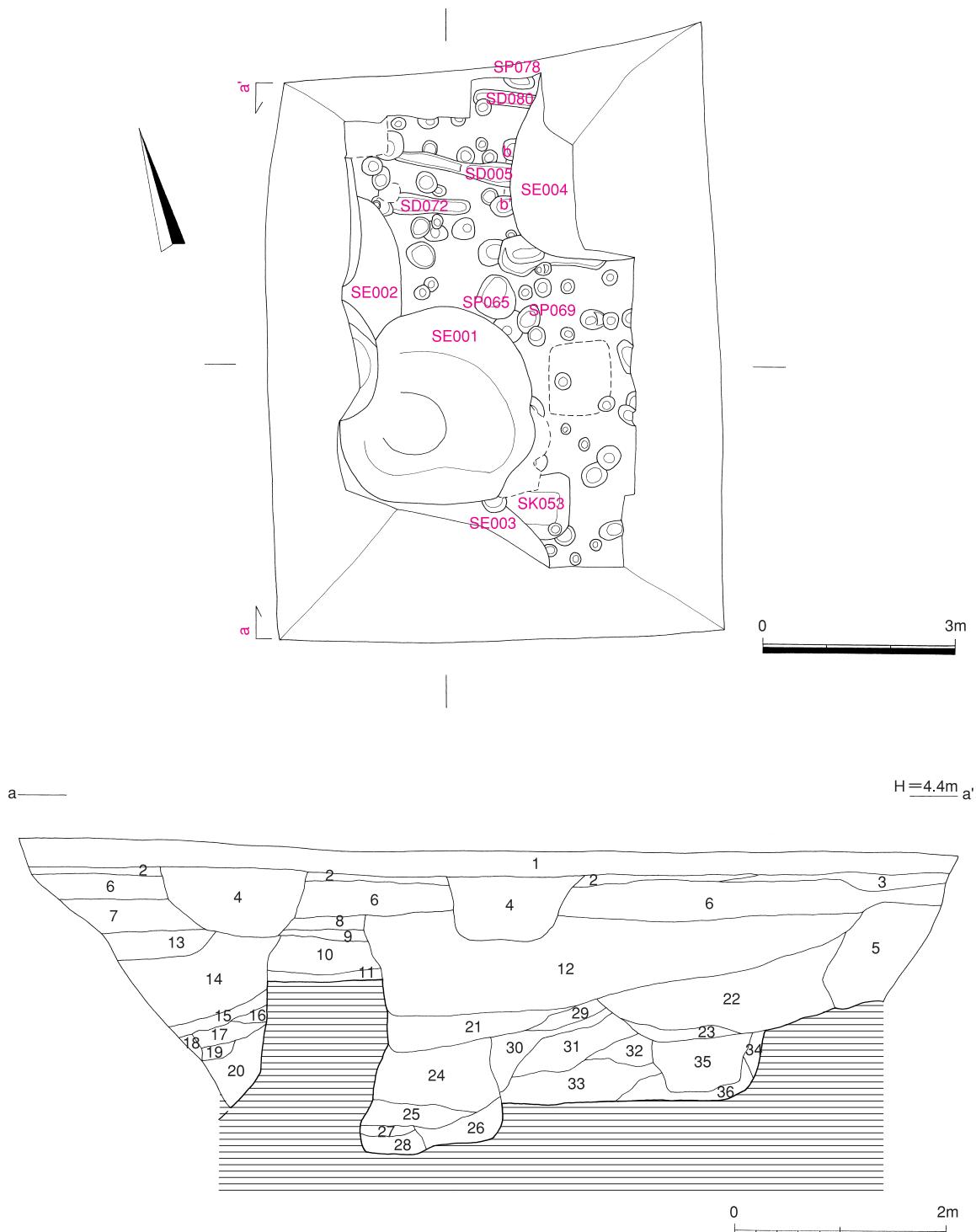
発掘調査は平成23（2011）年1月11日に着手した。調査時の排土を事業地内で処理せざるを得なかったため、調査対象地北西側約2/3の調査を先行し、調査後、排土を反転して残る南東側の調査を行った。まず、同日重機によって北西側の表土を剥ぎ取り、翌日に発掘器材やリース器材を搬入した。その後、壁面養生、ベルトコンベアや昇降用階段の設置、トラバース杭の設定を実施し、遺構検出を開始した。順次、検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、北西側調査区の作業がほぼ終了した1月26日に高所作業車によって全体写真を撮影した。28日には再び重機を投入し、排土の反転および調査区南東側の表土剥ぎ取りを行った。31日より同様の人力作業を進め、2月9日に全体写真を高所作業車によって撮影した。翌日に重機による埋め戻しや片付け等を進め、14日に器材を撤収して第68次調査を完了した。なお、調査対象面積は、「I.-1. 調査に至る経緯」のとおり、敷地面積196.5m<sup>2</sup>のうち81.8m<sup>2</sup>であったが、調査区周辺の安全対策上、実際の調査面積は66.4m<sup>2</sup>であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。

#### 2. 遺構と遺物

##### 1) 井戸 (SB)

以下に4基の井戸を報告するが、調査区が狭小なことから、全容が判明するものはSE001の1基のみである。また、調査区の北西壁面際で検出したもののうち、第5図の21層や22・23層に見られる掘り込みも井戸の可能性がある。

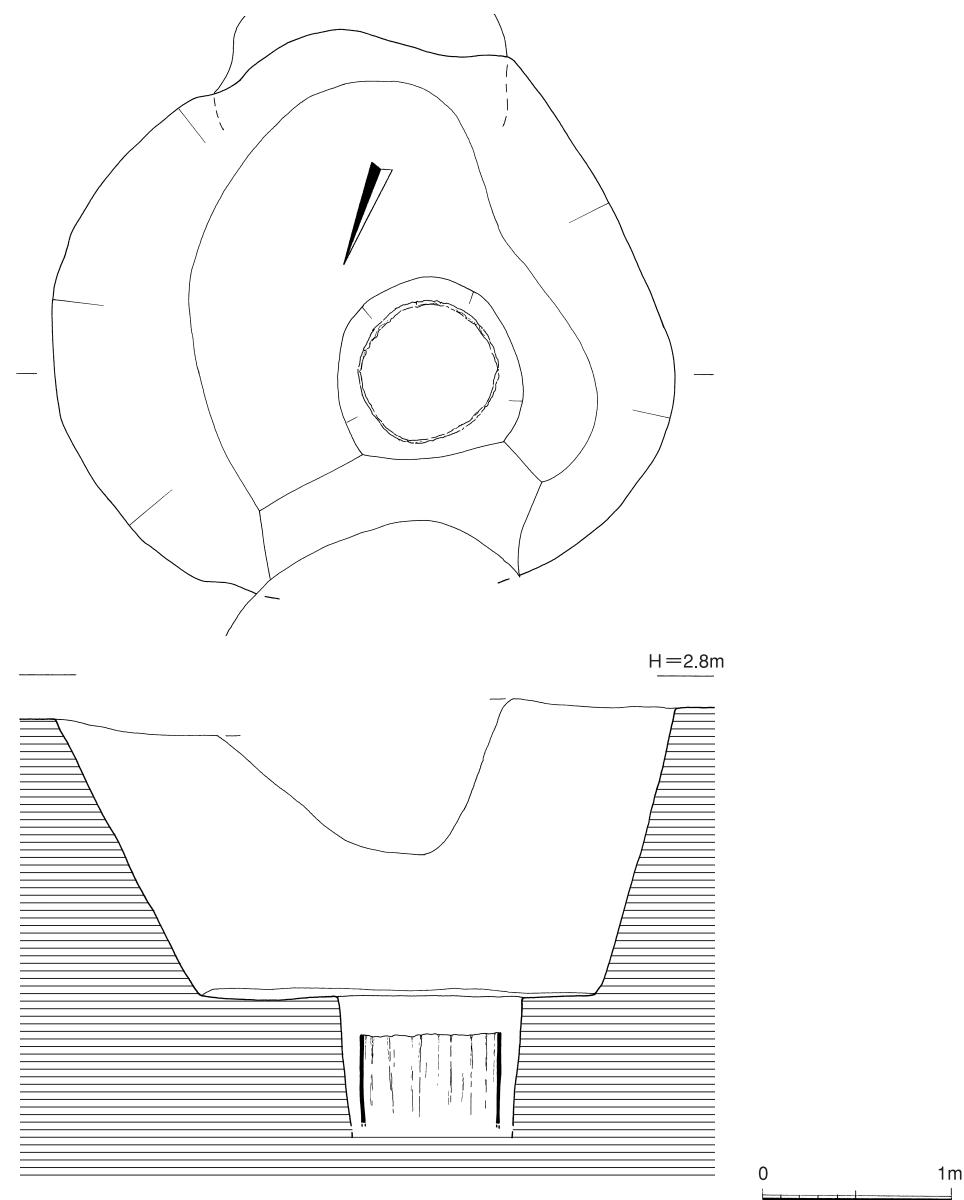
**SE001**（第6図、図版2-2） 調査区の西側に位置する井戸で、北側の一部を別遺構に切られるが、ほぼ全体が把握できる。SE002・003に後出するもので、平面プランは不整ながら円形を呈し、径3～3.3mを測る。上面からの深さ1.4mに平坦面を設け、ほぼ中央部に井筒の下部を据える径約1mの掘り込みを有する。その内部には、遺存状況不良ながら、厚さ1cm程度の板材を組み合わせた径約0.7mを測る水溜用の木桶を検出できたが、標高0.4m付近で著しく湧水したため、安全上、以下の掘削作業を断念した。掘り方の覆土は暗黄褐色砂を主体とし、暗灰褐色砂質土小ブロックが



調査区北西壁面土層

- |   |   |   |
|---|---|---|
| 1 真砂土(客土)   | 14 黄茶褐色砂質土(炭化物片少量含む)                          | 28 暗黄褐色砂(やや粗く、暗灰茶褐色粗砂ブロック含む)                        |
| 2 暗褐色土(旧表土)   | 15 暗黄褐色砂質土(暗灰褐色土、明灰褐色粘土ブロック含む)                | 29 暗灰茶褐色土(やや砂質、炭化物片、黄灰褐色粘土ブロック少量含む)                 |
| 3 褐色土(黄褐色粘土混じる)   | 16 黄褐色砂                                       | 30 黄褐色砂(暗灰褐色砂質土ブロック多量含む)                            |
| 4 瓦礫、ブロック・モルタル片   | 17 黄褐色砂(暗灰褐色土、明灰褐色粘土ブロック含む)                   | 31 暗灰茶褐色砂質土(暗黄褐色砂ブロック含む)                            |
| 5 しまりのない灰褐色土(コンクリート・モルタル片含む)                                | 18 暗黄褐色砂                                      | 32 暗灰茶褐色砂質土(黄灰褐色粘土ブロック含む)                           |
| 6 灰茶褐色土(黄灰褐色粘土ブロック、炭化物片含む)                                  | 19 暗黄褐色砂(暗灰褐色土、明灰褐色粘土ブロック含む)                  | 33 黄褐色砂(暗灰褐色砂質土ブロック含む)                              |
| 7 暗灰茶褐色土(炭化物片含む)  | 20 黄褐色砂(暗灰褐色土ブロック少量含む)                        | 34 暗黄褐色砂質土  |
| 8 褐色土(炭化物片、焼土塊含む)   | 21 暗黄褐色砂質土(暗灰茶褐色砂質土ブロック多量、<br>暗灰褐色粘土ブロック少量含む) | 35 暗灰茶褐色土(やや砂質、黄灰褐色粘土ブロック、<br>炭化物片少量含む、下層に暗黄褐色砂混じる) |
| 9 褐色土(炭化物片少量含む)   | 22 暗灰茶褐色砂質土(黄灰褐色粘土ブロック、炭化物少量含む)               | 36 黄褐色砂(暗灰褐色土ブロック微量含む)                              |
| 10 暗褐色土(やや砂質、炭化物片少量含む)                                      | 23 暗灰茶褐色砂質土(黄灰色砂互層に混じる)                       | *13~20層 : SE003                                     |
| 11 暗黄茶褐色砂質土   | 24 暗黄褐色砂(暗灰褐色土ブロック含む)                         | *21~28層 : SE001                                     |
| 12 灰茶褐色土<br>(6層に類似するが、やや淡い、全体に均一で<br>黄灰褐色粘土ブロックおよび炭化物片少量含む) | 25 黄褐色砂(暗灰褐色土ブロック少量含む)                        | *29~36層 : SE002                                     |
| 13 茶褐色土(炭化物、燒土塊含む)  | 26 黄褐色砂(暗灰褐色土ブロック含む)                          |   |
|   | 27 暗黄褐色砂(暗灰褐色土ブロック多量含む)                       |   |

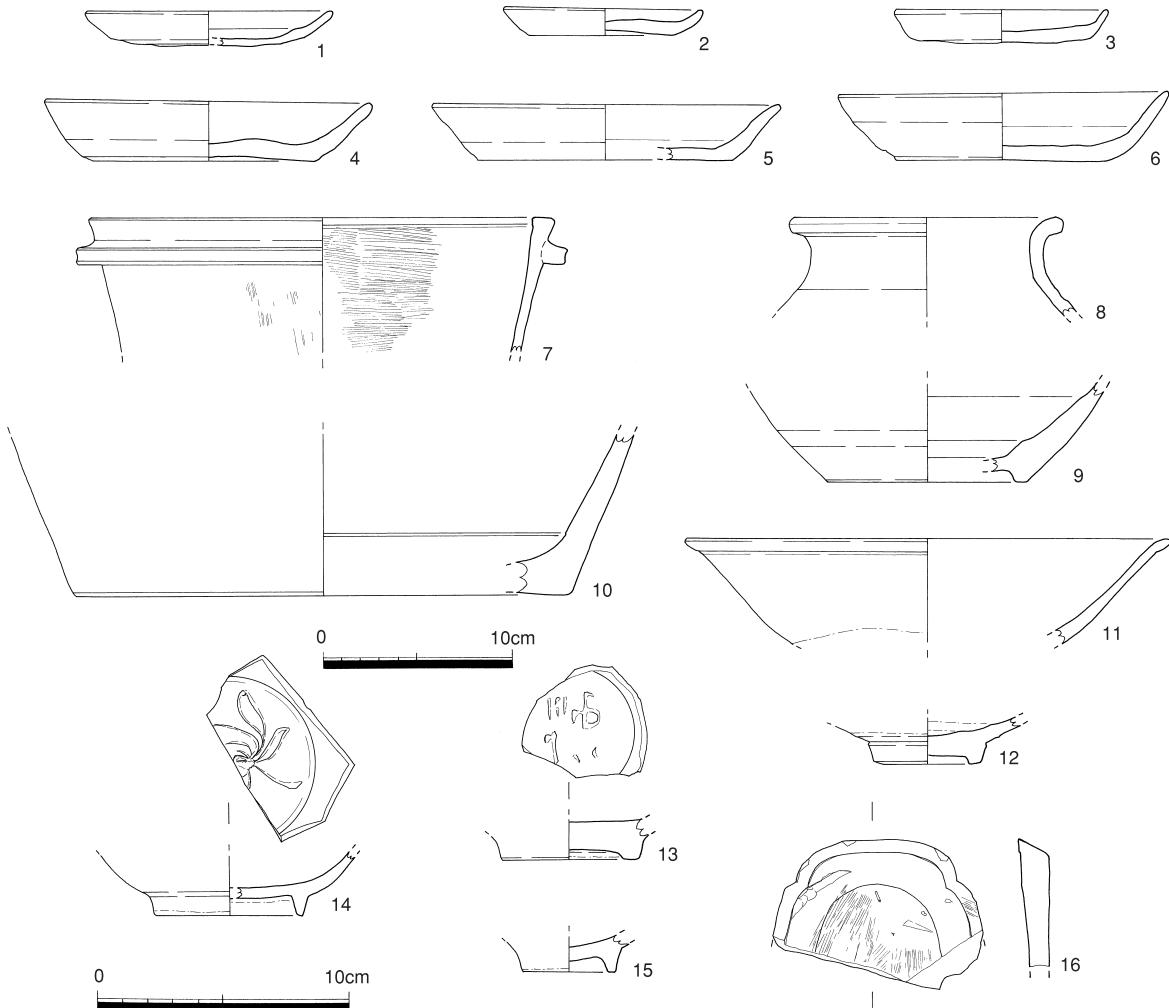
第5図 調査区全体図(1/100)および調査区北西壁土層実測図(1/60)



第6図 SE001 実測図 (1/40)

混じる。また、深さ約0.4mでやや粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とする円形プランの井筒痕跡が確認できた。

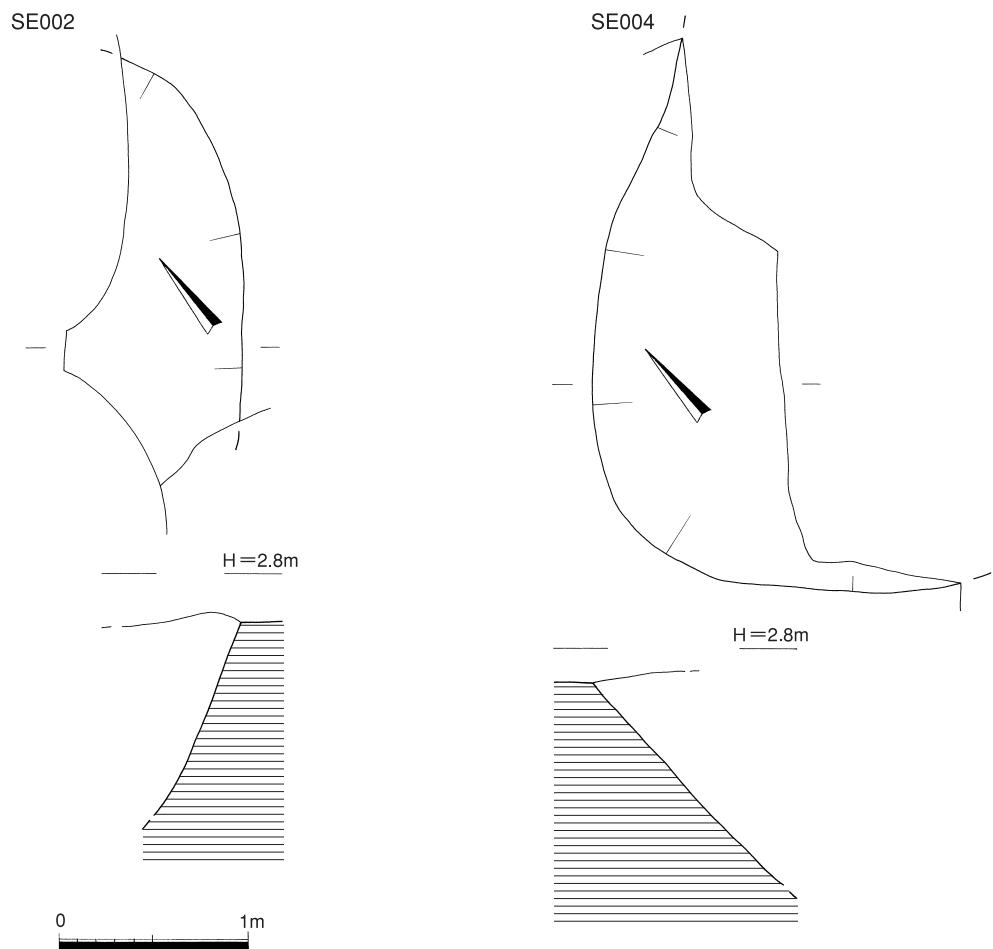
出土遺物(第7図) 6・12は井筒上層出土、他は掘り方埋土からの出土である。1～6は土師器で、この内、1～3は小皿である。外底部は1のみ回転ヘラ切り、他は回転糸切りで、2を除いて板状圧痕を有する。順に復元口径は、9.8、7.9、8.4cmを測る。4～6はいずれも回転糸切り底の壊で、板状圧痕は認められない。順に復元口径は、12.8、13.8、12.8cmである。7は瓦質土器の鍋で、口縁下に断面方形の鍔を貼付する。口縁部の上面は平坦で、鍔部を含めてヨコナデ調整、体部の内外面は刷毛目を施す。口縁部外面には爪によるもと思われる痕跡が見られ、突帯以下には煤が付着する。8～10は中国陶器である。8は壺で、短い頸部に外反する口縁部が付き、端部は丸く納める。また、頸部と胴部の境界に段状の沈線を有する。鈍い赤褐色の胎土に施釉されるが、二次的な加熱による釉の剥落が認められる。9は碁笥底状の底部をなす鉢もしくは壺の底部で、内外面に薄くオリーブ



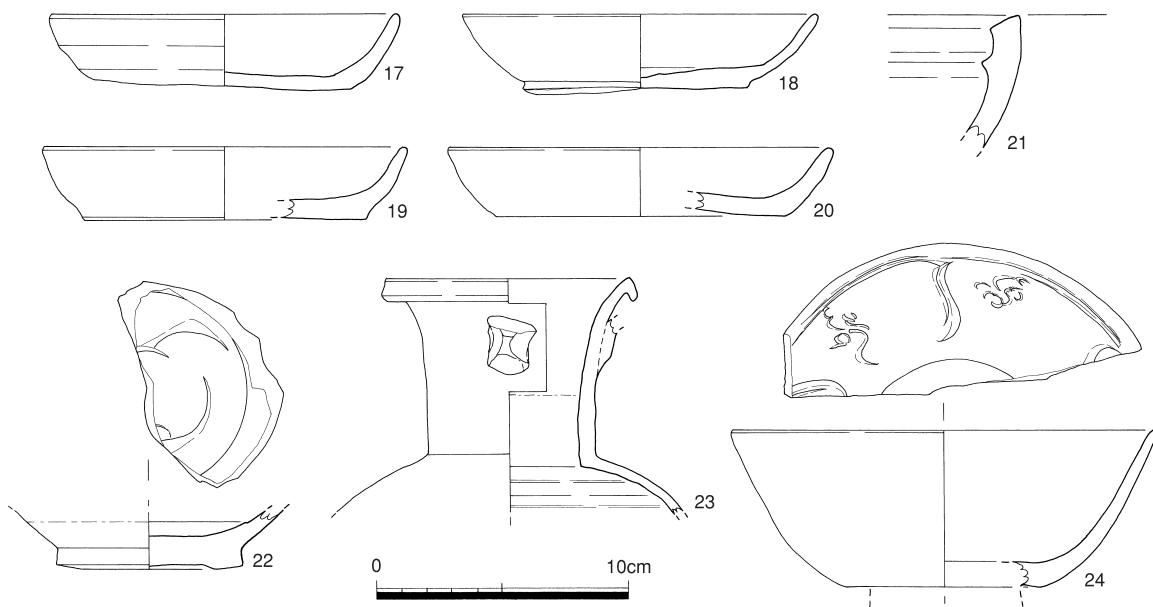
第7図 SE001出土遺物実測図 (10は1/4、他は1/3)

灰色の釉が施される。10は甕底部であろう。暗赤褐色の胎土には白色の砂粒を多く含み、外底部を除き、やや光沢のあるオリーブ色の釉が施釉される。11・12は白磁である。11は碗V-2類と思われるもので、口縁部を外反させる。外面の下半以下は露胎である。黄白色の胎土はやや軟質で、釉色はやや黄味がかる。12は見込みの釉を輪状にカキ取る皿III-1類で、外面の下半には施釉されない。13～15は龍泉窯系青磁碗である。13は碗I類で、見込みに不鮮明な文字を印刻する。釉の一部は畳付きにまでおよぶ。14は碗III-1B類で、見込みには片彫りによる草花文を有する。15は小碗III類で、内底部は平坦でなく、丸味がある。16は黒灰色の石材を用いた石製硯で、四葉形を呈するものと思われる。海部は浅く削り出され、その中央部は使用によって緩い凹面をなす。他に瓦器、須恵質土器、同安窯系青磁等の細片やスサ入り粘土塊が出土している。以上の出土遺物から13世紀後半の井戸と考えられる。

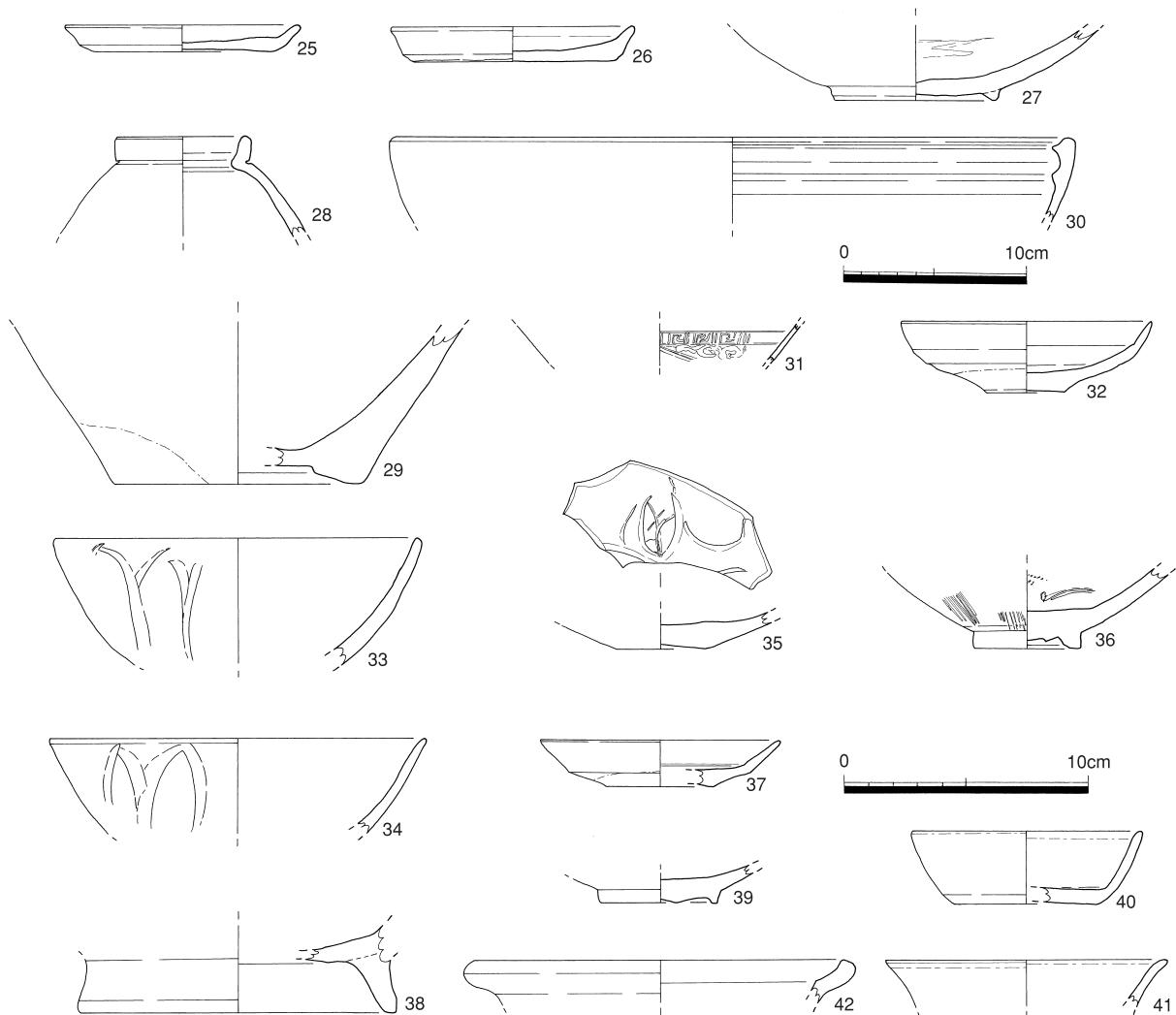
SE002(第8図、図版2-3) 調査区北西の壁面際で検出したため、掘り方の一部を確認し、壁面の一部を調査したにとどまる。遺構の大半は調査区外に位置し、SE001や北西壁土層中の21層や22・23層の掘り込みにも切られる。覆土の状況や掘り方の規模から井戸と判断した。また、同土層の29～36層が本遺構で、35層は井筒の可能性がある。



第8図 SE002・004 実測図 (1/40)



第9図 SE002 出土遺物実測図 (1/3)



第10図 SE003・004出土遺物実測図 (29は1/4、他は1/3)

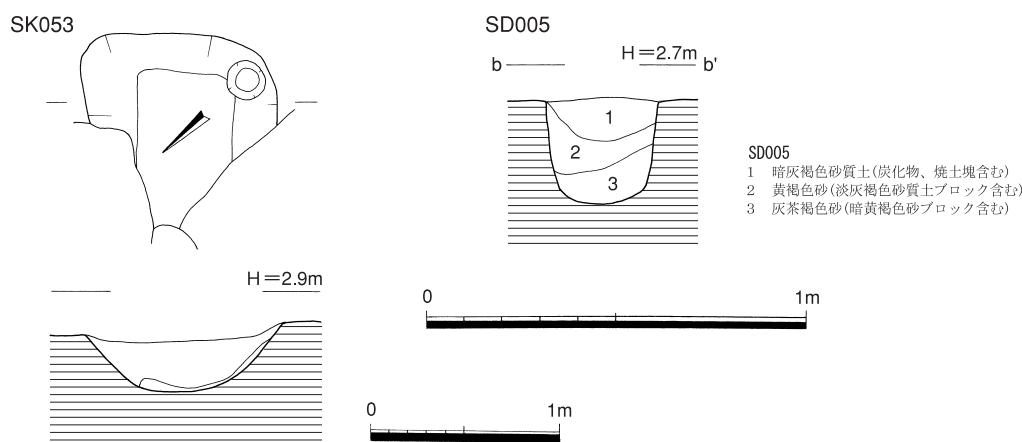
出土遺物（第9図） 17～20は回転糸切り底の土師器坏で、18を除いて板状圧痕を有する。復元口径は13.6～15.0cmを測る。21は中国陶器の鉢である。面をなす口唇部は内傾し、口縁部内面に断面三角形の突帯を1条配する。胎土には白色の砂粒を多く含み、にぶい赤褐色を呈する。内外面は露胎である。22・23は白磁である。22は碗IV-1a類で、見込みに段状の沈線が巡る。内面および外面の上位に明灰白色の釉が施されるが、他は露胎である。胎土には細かい空洞が目立つ。23は口縁部を外側に折り曲げる水注で、把手は基部を除いて欠損する。胎土は灰色で、灰白色の釉を外面および内面頸部まで流し掛けする。24は龍泉窯系青磁碗I-4a類である。内面の口縁下および体部に2本並行の片彫りによって分割線を入れ、その内部に細い雲文を施す。釉調は明オリーブ灰色である。他に瓦器、須恵質瓦、同安窯系青磁、青白磁等の細片が出土した。土師器の法量とSE001の前後関係から13世紀前半に位置付けられよう。

SE003(第5図、図版3-1) 調査区の南西壁際で掘り方の一部が確認できたのみで、南側の大半は調査区外に延びる。また、北東側をSE001に切られる。SE002同様に底面までの掘削には至っていない。北西壁土層に断面の一部が認められ、13～20層が本遺構に相当する。

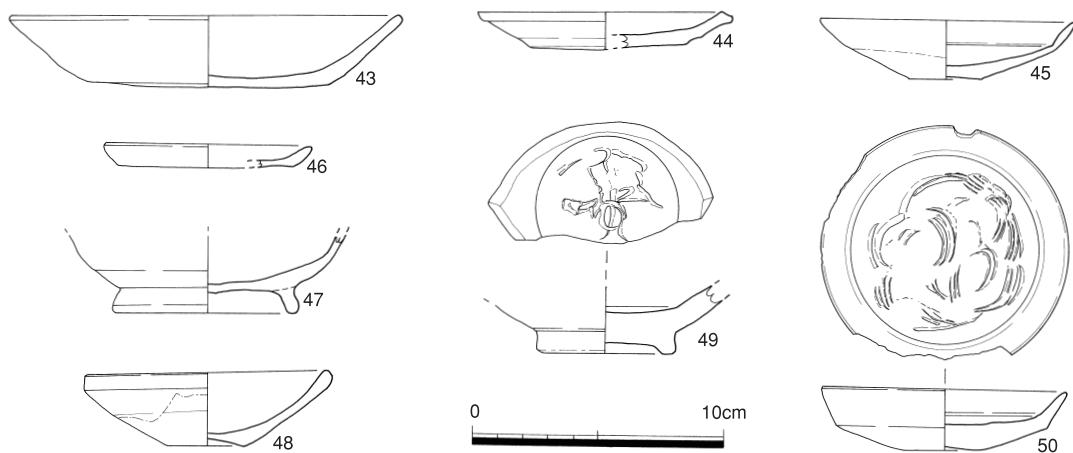
出土遺物（第10図25～37） 25・26は土師器小皿である。共に外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。順に復元口径は、9.6、10.0cmを測る。27は瓦器椀で、断面三角形状の低い高台を貼付する。外面はヨコナデ、内面はヘラ研磨により平滑に仕上げる。28～30は中国陶器で、28・29は壺である。28は短い口縁部に体部が続く。淡茶褐色の胎土に茶褐色の釉が内外面に薄く掛けられる。29は底部で、外底部を高台風に削り出す。灰色の胎土はやや軟質で、黒色の粒子が目立つ。淡灰色の釉が薄く施される。30は口縁部内面に1条の突起を有する鉢である。口縁部は内傾し、口唇部は凹面をなす。緑灰色の薄い釉が内面にのみ施される。灰色の胎土には砂粒を多く含む。外表面の露胎部分はにぶい褐色を呈する。31は青白磁の碗もしくは皿である。内面には型押しによって雷文および雲文が施される。薄手の器壁である。32は白磁皿VI-1a類である。体部と底部の境界を高台風に僅かに削る。体部上半で鈍く屈曲し、その内面には沈線を有する。黄味のある釉が体部下半を除いて施される。33～35は龍泉窯系青磁である。33・34は碗II-a類で、鎬のない蓮弁文を片彫りにより体部に施す。釉色は類似する暗緑色を呈する。35は皿I-1b類である。見込みにやや不鮮明ながら草花文を片彫りにより施文する。外底部は釉を削って露胎とする。36・37は同安窯系青磁で、36は碗I-1b類である。見込みには圈線が巡り、体部内面には櫛状工具および片彫りによる施文を有する。外面の下半以下は露胎である。37は皿I-1a類で、体部下半には施釉されない。屈曲部の内面に沈線を有する。他に須恵質土器、白磁碗、高麗陶器等の細片やスサ入り粘土塊が出土している。以上の出土遺物から13世紀前半代の井戸に比定できよう。

SE004(第8図、図版3-2) 調査区の東隅に位置し、調査区内では1/4程度を確認した。掘り方は現況から径3m以上を測るものと思われる。暗灰褐色砂質土に暗黄褐色砂が混じり、一部では互層をなす。規模や覆土から井戸と推定されるが、底面まで調査が及んでいない。なお、後述するSD005・080に後出する。

出土遺物（第10図38～42） 38は土師器椀cで、高い高台を貼付する。内外面をヨコナデ調整する。39～41は白磁で、39は碗である。高台は低く、底部の器壁が厚い。釉は青味を帶び、一部が高台際まで掛かるが、外底部が露胎である。40・41は口禿げの皿IX類である。40は外表面下半を露胎とする2類で、露胎部分は淡褐色を呈する。41の口縁部はやや外反し、口禿げ部分には煤状の付着物が認められる。42は龍泉窯系青磁の坏で、屈折する口縁の端部はつまみ上げる。釉色は青緑色を呈する。他の出土遺物として糸切り底の土師器、瓦器、同安窯系青磁等の細片がある。以上から13世紀後半代の遺構と考えられる。



第11図 SK053、SD005 実測図 (SK053は1/40、SD005は1/20)



第12図 ピット、遺構検出時出土遺物実測図(1/3)

## 2) 土坑 (SK)

**SK053(第11図)** 調査区の南側で確認した土坑で、北西側をSE003や攪乱に切られる。現況で隅丸方形を呈し、幅約1m、深さ0.3mを測る。壁面の傾斜は緩く、覆土は茶褐色砂質土を主体とする。出土遺物には回転糸切り底の土師器壊、白磁等が少量あるが、いずれも細片である。

## 3) 溝 (SD)

**SD005(第11図、図版3-3)** 南東側をSE004に切られる幅0.2~0.3m、深さ0.1~0.3mの直線的な溝である。南東部で段落ちして深くなる。断面形は「U」字形を呈する。出土遺物として土師器、瓦器、白磁IV類の細片やスサ入り粘土塊が少量ある。

**SD072(第5図)** SD005の南西側約0.5mに位置し、南東端部を検出した。規模はSD005に類似し、覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。出土遺物は少量で、土師器小皿・椀、瓦器、白磁の細片やスサ入り粘土塊等がある。

**SD080(第5図)** SD005の北東約1mにほぼ並行する溝である。北西側に端部があるものの、南東側をSE004に切られる。SD005と規模が類似し、覆土はSD072同様の暗灰褐色砂質土である。回転糸切り底の土師器や瓦器、白磁等の細片が出土した。

## 4) その他の遺物

ここでは、ピット(SP)および遺構検出時の出土遺物をとりまとめて報告する。

**ピット(第12図43~45)** 43はSP065出土の土師器壊で、板状圧痕がある回転糸切り底である。44は口径10.2cmを測る回転ヘラ切り底の土師器小皿で、口縁部内面に凹線を有する。SP069から出土した。45はSP078出土の白磁皿VI-1a類である。釉色は黄色味が強く、体部下半は露胎である。

**遺構検出時(第12図46~50)** 46は回転糸切り底の土師器小皿、47は土師器椀である。48は中国陶器の皿で、外底部には回転ヘラ切り痕を残す。赤茶褐色の釉を施すが、外面下半は露胎である。49・50は龍泉窯系青磁で、49は見込みに不鮮明な草花文印を有する碗、50は皿I-3a類で、見込みに櫛状工具によって施文される。

## 3. 結語

砂丘西側斜面にあたる今回の調査では、13世紀代の井戸を主体とする遺構を検出し、12世紀後半以降、該地の土地利用が開始されていることを追認できた。多くの遺構にスサ入り粘土塊が認められ、今後も注意を払いたい。なお、近接する第24・51次で認められた焼土層は顕著ではなかった。

# 図 版



作業風景





(1) 調査区南東側全景（北東から）



(2) 調査区北西側全景（北東から）

図版2



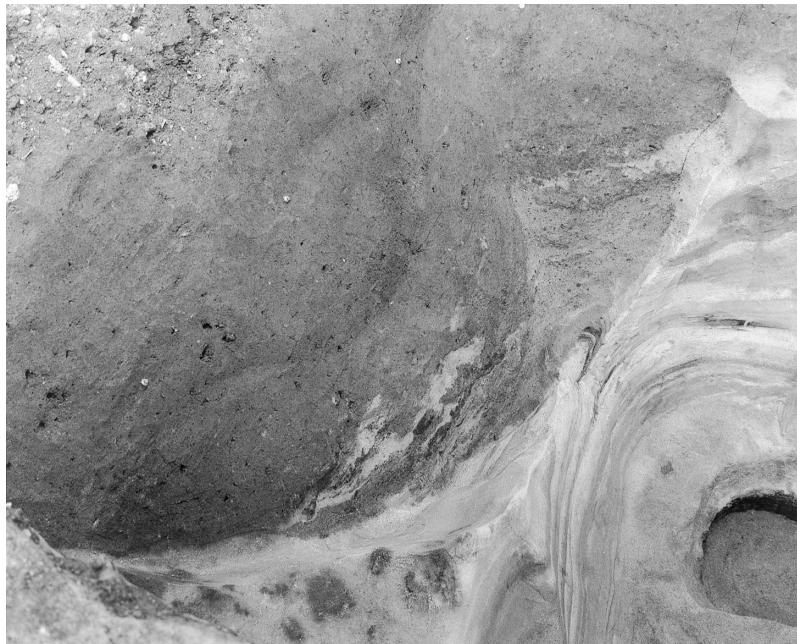
(1) 調査区北西壁土層（東から）



(2) SE001（南東から）



(3) SE002（南東から）



(1) SE003 (東から)

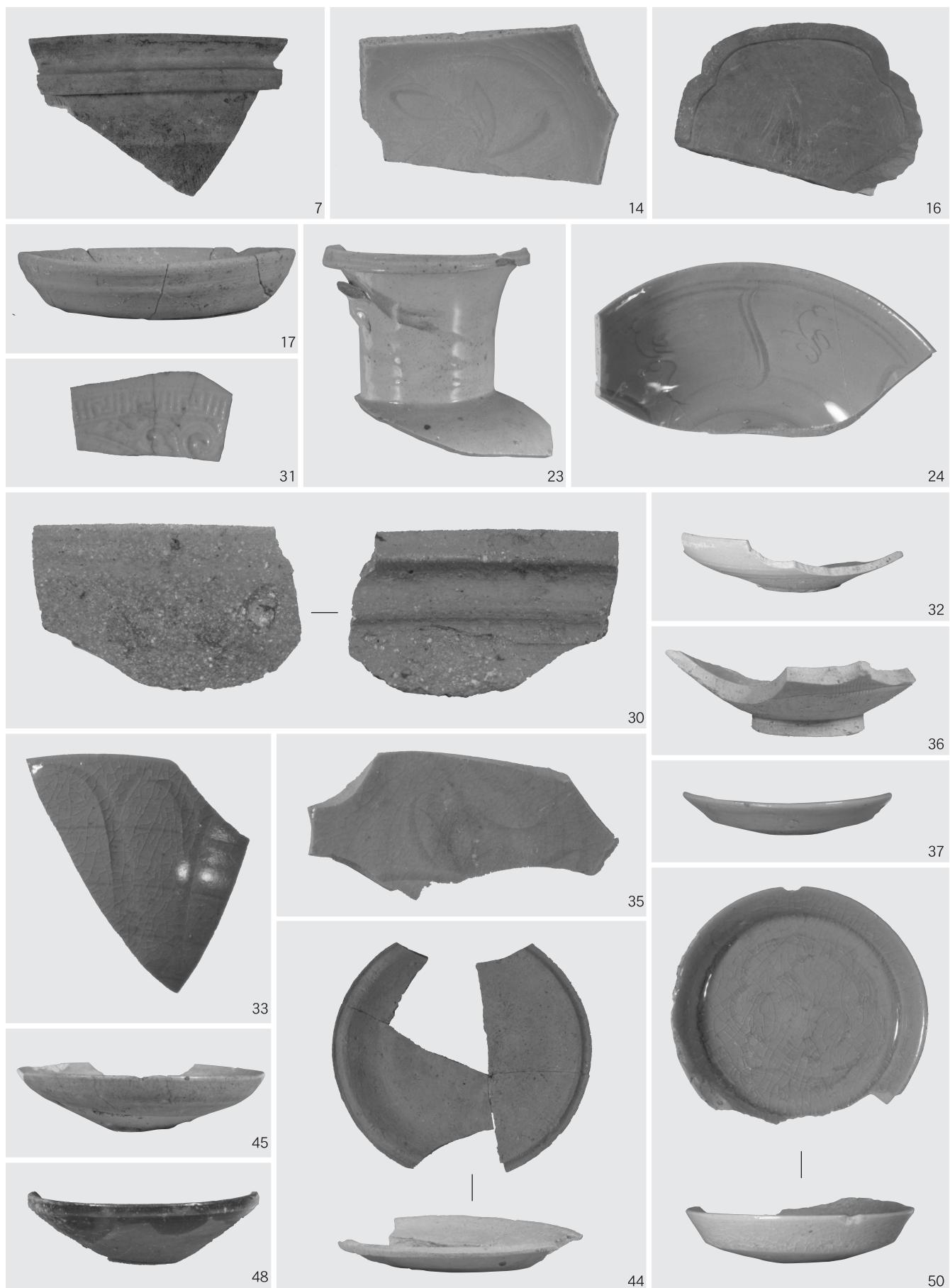


(2) SE004 (北東から)



(3) SE005 土層 (北西から)

図版4



出土遺物

## 報 告 書 抄 錄

---

はこ ざき  
**箱崎 47**

—箱崎遺跡第68次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1166集

2012(平成24)年3月16日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号  
(092)711-4667

印刷 株式会社月成印刷  
福岡市博多区大井2-13-27  
(092)611-3600

---